

【ポスター発表】

高齢者交流学习の効果に影響を及ぼす要因
—ボランティア経験による違いと効果的な支援の検討—

○徳島大学大学院 竹内 祐子 (8200)

白山 靖彦 (徳島大学大学院・4836)、柳沢 志津子(徳島大学大学院・4463)

藪内 さつき(徳島大学大学院・8578)

〔キーワード〕 高齢者交流学习、高齢者イメージ、かかわり体験

1. 研究目的

徳島大学歯学部では、入学初年度に地域高齢者との交流学习を行っている。高齢者との学習・実習の場でのかかわり経験やボランティア経験（以下；かかわり体験）の重要性はすでに示されており、特に「実習」などの実践活動が有用であると証左されている。本学では交流学习を実施し、偏りの少ない高齢者イメージの構築に配慮するとともに、交流学习の効果に影響を及ぼす要因について検討した。中でもボランティア経験による違いと効果的な支援の検討を試みた。

2. 研究の視点および方法

【視点】大学生を対象にした高齢者のイメージ調査では、知識や体験の有無が高齢者の理解度に影響を及ぼすといわれている。奥村らは、高齢者との意図的なかかわり経験が肯定的イメージにつながるという報告を行っており、さらに兎澤らは高齢者理解のためには、連続的な学習の積み重ねに加えて教育方法を考慮することも必要であると述べている。

【対象】2013年と2014年度において、T県内で社会福祉士および歯科医療従事者を養成する大学の1年次に在籍した計41名を対象とした。

【方法】交流学习は、表1のとおりT市内の養護老人ホームに入居する高齢者と1対1でコミュニケーションを深めた。交流後に全員が集合し施設職員との質疑応答の時間を設け、各自が交流場面を振り返る内容のレポートを作成した。教員はレポート内容から重要な気づきや交流中に生じた悩みなどに対してフィードバックを行った。

表1 交流学习の流れ

回数	時間	内容
1	13時～16時30分	交流学习オリエンテーション (施設説明会・アンケート調査)
2～4	〃	交流学习
5	〃	中間振り返り(グループワーク)
6～9	〃	交流学习
10	〃	最終振り返り
11	〃	学内演習(アンケート調査)

アンケート調査は、交流学习の初回および最終回に実施した。調査項目は、「かかわり体験」として、高齢者とのふれあい体験・ボランティア・施設訪問の経験を「あり」「なし」の2件法で回答を求めた。加えて、近藤らの尺度項目を改訂した「高齢者に対するイメージ」10項目について、6段階で回答を得た（表2）。

「かかわり体験」の有無が、高齢者イメージに影響するのかを検討するため、対象学生41名を「かかわり体験」のあり群（19名）となし群（22名）に群分けし、Studentのt検定を行った。また、交流学习前後における高齢者イメージの変化については、対応のあるt検定を行った。なお、統計学的分析にはIBM SPSS Statistics Ver.21.0を用いた。

表2 高齢者イメージ10項目

清潔な／不潔な	強い／弱い
あたたかい／冷たい	生き生きとした／活気のない
自立／依存	社交的／非社交的
頑固／素直	思いやりがある／自分勝手な
裕福／貧乏	明るい／暗い

さらに、中間振り返り後に行ったアンケート調査の自由記載から、当該授業の効果や高齢者イメージにおける変化の把握を試みた。

3. 倫理的配慮

学生には、事前に研究目的と方法、結果の公表について説明を行った。調査票への記入は無記名とし、調査への参加は自由意志であること、未記入でも個人評価の対象にはならないことを口頭および質問紙上で説明し了解を得た。

4. 研究結果

交流学習前の結果をみると、「高齢者とのかかわり体験」あり群はなし群に比べて、「生き生きとした／活気のない」、「思いやりがある／自分勝手な」の項目で否定的イメージが有意に高かった（それぞれ $p<0.01$ 、 $p<0.05$ ）が、交流学習後には、肯定的イメージへと有意に変化していた（いずれも $p<0.05$ ）。また、41名全体の交流学習前後の変化をみると、「強い／弱い」、「生き生きとした／活気のない」、「思いやりがある／自分勝手な」、「明るい／暗い」の4項目で否定的イメージから肯定的イメージへと有意に変化したことが分かった（いずれも $p<0.05$ ）。

中間振り返り後に実施したアンケートの自由記載によると、「グループワークで意見交換を行い、他学生の交流学習に対する不安や悩みなどを知り共感した。」「コミュニケーションの取り方は様々であり、今後の参考になった。」などの意見があった。また高齢者イメージの変化に関して、「それぞれ性格が全く違う人もいることを知り興味深かった。」「日中の過ごし方も、積極的に施設の行事に参加している方や自室にこもりがちな方など多様であることが判った。」という趣旨の記述があった。

5. 考察

以上の結果から、「かかわり体験」あり群は、高齢者の活動性の一部に否定的なイメージを持っていることが分かった。その要因として、大学入学以前に接した高齢者のADLが低かった可能性が予想される。特別養護老人ホームや養護老人ホームなど、かかわり体験をどのような施設で実施するかで、高齢者のADLや認知の状態に大きな違いが生ずる。学生は、「かかわり体験」で出会った高齢者の状態を高齢者イメージとして固定化し易いと考えられる。本研究の結果では、高齢者イメージのうち4項目において、高齢者イメージが虚弱的から活動的に変化していた。変化の要因は、長時間かつ複数回にわたり高齢者とコミュニケーションを図ることで、高齢者の個別性に対する理解が深まった結果であると考えられる。加えて、交流学習の中で中間振り返りを実施し、学生相互に交流中の様子や感想などの意見交換を行う機会を設けた結果、高齢者の多様性を知り、当初学生が抱いていた偏った高齢者観を見直すきっかけになったと考えられる。

このことから本学が実施する高齢者交流学習は、より現実的で偏りの少ない高齢者イメージの構築に効果的であるとともに、大学入学以前に実施されているかかわり体験によって生じた否定的イメージの是正にも有用であると考えられる。